

たかしまの森へ行こう！～森と人がつながるプロジェクト～ 3月25日「高島の杉で本棚をつくってみよう！」に参加しました

はじめに・・・

安曇川流域は奈良時代以前から、柚（そま）と呼ばれた材木の産地でした。昔は朽木で伐採された山の木はイカダに組んで安曇川の河口まで運ばれていましたが、1200年続けられたイカダ流しも昭和に入り衰退。二度の戦争にイカダ乗りの若者も兵隊にとられ、流路も荒廃し昭和23年安曇川水系のイカダ流しは廃絶しました。



イカダ流しは危険な仕事で今はなくなってしまいましたが、材木が無事に河口までたどり着くのを見守ってくれたシコブチ信仰は、今も高島地域に伝わっています。

岡本木材さんは安曇川流域文化遺産活用推進協議会企画・発行の「安曇川 RIVER MAP」をパネルにしてご用意いただきました。安曇川の流れを目で追うと、今回の企画「たかしまの森と人のつながり」がよくわかります。山や川や湖を健全に保全し次世代に引き継ぐために、安曇川流域の森林に関わる人々の生活や仕事を学ぶことは高島に住む私たちの大切な役目だと思いました。



安曇川河口の南船木で昭和37年から製材所を営む岡本木材株式会社の工場の一画で「森へ行こう」プロジェクトの第3回勉強会が開催されました。講師は製材所の経営を引き継がれた三代目岡本顕典さんと、入社1年目の神戸からUターンされた斎藤欽也さん。木作業の前に工場内を案内していただきました。原木を製材し、柱や桁（けた）など家の部材に加工する過程で、製材の仕方によって製品の価値は変化することや、色合い、樹種、用途、木目など、木は奥深く幅広い魅力があると、製材の仕事の楽しさを岡本さんはいきいきと語ってくださいました。

次に高島産の杉を使って木工作業の始まりです。のこぎり・きり・ヤスリ・かなづちなど作業手順に沿って道具が用意されていました。杉材はクランプで固定して作業しましたが、木肌に傷がつかないように当て木をしました。DIYは初めてでしたが講師の斎藤さんの丁寧な指導で安心して取り掛かることができました。のこぎりをひくとき、かなづちで釘を打つたびに手元が定まらず何度もあっと声を上げてしまいました。紙ヤスリを使って傷を整え、杉材の表面を滑らかにする作業は不思議な感覚でした。重くて硬いイメージの木材に「柔らかい」性質を実感し驚きました。最後に森の木のスタンプを本棚に押しして出来上がり！とても貴重な体験でした。



作業後、滋賀県西部・南部森林整備事務所高島支部の林業普及指導員山崎哲さんは「琵琶湖森林づくり県民税を活用した取り組み」を講話、また「高島市の木を使おう！」と題して住宅・家具・生活用品・燃料などに高島市の木材を利用する必要性と、森林を維持するために伐採して木を使うことの重要性を説明されました。農作物の収穫市のように「たかしまの森の市」が開催され、そこで木の情報を得、気軽に地域材に触れることができれば楽しいですね。県の取り組みに県産材の学習机がありました。高島市の小学校で高島産材の学習机を使い、校舎も高島産の木造校舎になればいいのにと私は思いました。



岡本さんは「様々な人との出会いの中で地域に根差した製材所としてその役割を果たしていきたい。今後もみなさんに楽しんでもらえる企画ができるようにがんばりたい。今回のような木工制作のイベントをまた開催したい」と話してくださいました。第2弾を楽しみにしています。

「たかしま産杉・岡本木材」のサインをお願いしたかったのですが、とりあえずは本棚に自分で手書きのシールを貼っておこうと思います。

(新旭在住 倉元史子)